

令和4年度 学校評価自己評価表(最終)

学校教育目標	学校教育目標 自ら学び、考え、行動ができる「きさ」の子どもの育成
重点目標	心と志(自立と貢献)を育てる学校

学校関係者評価委員(評価)
 A: 100 ≤ (目標達成) B: 80 ≤ (ほぼ達成) < 100
 C: 60 ≤ (もう少し) < 80 D: (できていない) < 60

評価計画			自己評価				学校関係者評価委員			
経営目標	評価指標	具体的な取組・方策	12月			分析(成果と課題)	改善方策	評価	記述(成果・課題)	
			達成値	達成度	評価					
中期	短期									
確かな学力を育成する	学習規律を定着させる。主体的・深い学びの充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 学習規律が身に付いた児童を90%以上にする。 自分の考えを伝え合い、考えを広げたり深めたりしているという児童の割合を60%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 「ベル着」「次の学習準備をする」「号令前後の静止」の徹底を図る。(強化週間を設け、児童会とも連携しながら意識付ける。) 学習を通した学びの深まり(初めの考えと学習後の考えの変化・友達のを聞いて広がったり深まったりした考えなど)を振り返る取り組みを進める。 	82%	91	B	<ul style="list-style-type: none"> 強化週間や声かけを行うことで児童への意識化、児童会での取り組みなどによって定着し、多くの児童が当たり前のこととしてできるようになっている。時間に余裕を持った行動ができなかったり、強化週間以外は意識が下がる時が見られた。授業終了後、すぐに次の授業の準備に移ることが難しい児童がいる。 授業の中で教え合う場面が見られたり、友達との意見交流の場をたくさん設けることで考えを広げることができた。友達の考えを聞いて自分の考えの変容まで振り返ることができていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 時間に余裕をもって行動ができるように指導者も授業時間を意識して授業を行うとともに、児童自身にも繰り返し声をかけていくことでベル着や次の授業の準備の意識化をさらに図る。引き続き児童会と連携して、学校全体で強化週間に取り組む。 質問することや、自分の意見とくらべることで、考えを深められるようにする。伝え合い、分かり合うことでの達成感や満足感を持たせられるようにする。そのために、考えを深められるような発問の工夫や授業づくりを行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 学習規律の定着について、家庭学習や自学力の向上に対して、具体的な取組や保護者の協力依頼が必要である。 児童会を通して、子どもたち自らが意識できるよう取り組まれていることは、素晴らしいと思う。 グループ学習や実習、ICTを活用した演習、振り返りなど意欲の持てる内容が見られる。 下半期の取組の結果、中間よりも達成度が上がっている。 授業中の教え合い等、協働的な学びが推進されている。振り返りが弱いようなので、振り返りを意識した声掛けをする。
	学力を確実に定着させる。	<ul style="list-style-type: none"> 国語科・算数科の単元テストで、80点以上の児童の割合を各学年85%以上にする。 三次市学力到達度検査(基礎・活用)で、全国平均を上回った教科数の割合を80%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 各教科の特性を生かした指導を工夫改善し、児童の「わかる・できる」を保障する。 ドリルタイムを機能的に活用し、基礎的な技能の習得や復習を図る。 自主学習ノートで予習、復習に取り組む、基礎学力の定着を図る。 	75%	88	B	<ul style="list-style-type: none"> 漢字や計算の繰り返し練習、前時の学習内容を授業の始めに確かめ、新しい学習につなげる授業づくりをすることで定着を図り、基本的な力をつけてきた。また、それらの取り組みが、児童の自信につながった。思考力・判断力・表現力が必要とする言葉や図を用いた説明や活用問題に対する課題が見られる。また、問題を理解する力ややった問題を見直す力にも課題が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> 引き続きドリルの繰り返し学習による基本的な学力の定着を図る。日常生活につながる活用問題に取り組むことで、具体的に状況をイメージしながら考えていけるようにする。言葉や図を使って説明する学習に重点を置く時間を意識的に作る。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ICTの活用も研修してほしい。 基礎の部分が気になることがあった。(漢字の書き順など)繰り返しが大事なかなと思った。 学習の到達度を可視化して取組んでいる。 「自主学習ノート」の取組が基礎学力の定着に生かされている。 思考力等の育成は時間をかけて取り組んでほしい。
	表現力を育成する。(小中一貫教育)	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを持ち、それを伝えている児童の割合を80%にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童が考えたいと思う授業づくり(めあて、発問の工夫)を行う。 ペア、グループ、一斉学習といろいろな形態で考えを伝える場を設定する。 考えを書く時間、学習の振り返りをする時間を確保する。 	78.0%	98	B	<ul style="list-style-type: none"> ペアやグループ活動で意見を交流する機会を多く設け、自分の考えを伝え合う時間の確保をした。なんでも伝えることができる学級づくりを意識して取り組んだ。導入時の工夫とやってみようという問題の提示、相手を意識した伝え方、発言者が固定化することに課題が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> 話し方や聞き方の基本の指導を丁寧に積み重ねる。授業の中で自分の考えを伝える機会を引き続き設定する。考えたい、考えたことを伝えたいと思える授業づくりをする。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 時間の関係もあると思うが、機会を増やすことで経験値を上げてほしい。 学習に向き合うことが難しい実態がある子どもについても理解受け止めながら個性を尊重している。 中間に比べて達成度は上がっています。小中一貫教育の取組でもあるので、所長・校長会での議論や学力向上委員会でも議論を積極的にを行い、吉舎全体で協働して取り組む。
豊かで健やかな心身を育成する	自己有用感の向上と礼節と規範意識の定着(小中一貫教育)	<ul style="list-style-type: none"> 自己有用感を持つ児童を80%以上にする。 規範意識をもつ児童を85%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の良さに気づき、伸ばしほこうとする意欲や友達の良さを認められる児童を育てると共に、認め合い、つながりを深める集団づくりに努める。 道徳学習プログラム「吉(よ)き舎(やどり)プログラム」を計画実施し、自分との関わりで考えさせる。 あいさつ、はきものそろえ、返事ができる児童を育成する。あいさつの仕方を具体化したものを提示し、委員会活動などで児童が主体的に取り組ませる。 アンケートやi-checkを分析し、PDCAサイクルで取り組む。 	89%	111	A	<ul style="list-style-type: none"> 特別活動や学校行事との関連を生かした「吉き舎プログラム」の実施に取り組んだ。道徳科での学びを生活に生かすことで、自己肯定感の向上及び友達を認め合うことが向上してきている。また、委員会活動の活性化により、全校児童で目標をもって取り組む活動があり、他者や自己を認める機会が増えてきた。 委員会活動を中心にはきものそろえ、あいさつを意識づける取り組みを行うことができた。あいさつをしている児童は増えてきているが、相手を意識したあいさつができていない児童は少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き、各教科や特別活動との関連を生かした「吉き舎プログラム」の計画、実施をしていく。 今後も委員会活動を活性化し、他者評価や自己評価する時間を設定して、自己有用感をもたせていく。 委員会活動の中で、相手を意識したあいさつができるよう、目標を示していくことやあいさつ運動を進めていく。 	A	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍で対話が少なくなっている。自己、他者、大勢の中での行動や発表などの研修ができればよい。 委員会の活性化が、子ども同士のつながりをつくっていると感じた。 「やってみよう」という授業の工夫があることで、「できた」と自信が持てる経験ができるようにしている。 役割分担をして責任を持ち協力して物事を進めるようにしている。 中間と同様に安定した達成値である。「吉き舎プログラム」や道徳科での取組の効果が表れている。引き続き委員会を中心に主体的な活動に取り組んでほしい。
	体力を向上させる	<ul style="list-style-type: none"> 新体力テストで、50%以上(昨年度32%)の項目が県平均または全国平均を超えるようにする。 食に関心を持ち、食べ物を好き嫌いせず食べようとする児童を75%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 新体力テストの県平均等や昨年度の自己記録をもとに、自己目標を設定させる。 体育科を中心に体づくり運動に取り組む。 給食時間や各教科等の時間を活用して、食に関する指導を行うとともに、掲示やたより等を活用して、食に関する興味・関心を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 体力36.4% 食87.7% 食72 食117 食A 	<ul style="list-style-type: none"> (体力)すべての項目において、県平均値かつ全国平均値より低い学年が見られた。運動を習慣的に行っている児童とそうでない児童で体力差がみられた。体育科の授業の始めに、走・跳の運動を取り入れ、走力の向上を図った。合同体育を通して、他学年の動きを見たり、真似したりすることで体力づくりに取り組むことができた。 (食)給食指導を通して、苦手なものにチャレンジする時間を設けたり、食べられる量に調節するなど引き続き取り組むことができた。数値は前回よりも下がったものの、個々で見ると給食を完食したり時間内に食べられる児童が増えるなど、食べることに対して前向きな姿勢が見られるようになってきた。また授業参観で食について取り上げることで、家庭への啓発も行うことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> (体力)授業始めの走・跳ぶの運動を継続して行うこと、全校で縄跳びや大縄跳びに取り組むことで運動への興味をもたせるとや体力につなげる。 (食)食への関心が低い、極端な偏食のある児童がいるため、今後も引き続き声かけ等を粘り強く行っていく。食事マナーに対する課題も多いので、給食指導等を通じて取り組んでいく。食に関する興味関心を高めるため、たよりや掲示物の工夫を引き続き行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 体力づくりについて、動作等基本の指導をお願いする。 縄跳びの取組がよいと思った。 就学前からの取組が大切であると実感している。保小の連携で、しっかりと取り組んでいくことで、体力面、食事面の向上を図りたい。 体力については、継続した課題ですね。すぐに結果が出るとは限らないので、粘り強く取り組むことが必要。焦らず慌てず長期的な視野に立って考えてほしい。(中間評価と同じ) 食については、家庭との連携しながら、引き続き取り組みを進めてほしい。 		
	信頼される学校	地域に信頼され、開かれた学校づくりを推進する。	<ul style="list-style-type: none"> 「きさ」小中一貫教育推進協議会の計画のもとに、小中9か年を見通しためざす子ども像に向け、連携教育の実施、充実を図る。 学校により、ホームページで小中連携教育の取組を具体的に分かりやすい内容で保護者、地域に情報提供を行う。保護者アンケートを実施し、小中連携教育に関わる保護者等の理解を把握し、取組に生かす。 	<ul style="list-style-type: none"> 「きさ」小中一貫教育推進協議会の計画のもとに、小中9か年を見通しためざす子ども像に向け、連携教育の実施、充実を図る。 学校により、ホームページで小中連携教育の取組を具体的に分かりやすい内容で保護者、地域に情報提供を行う。保護者アンケートを実施し、小中連携教育に関わる保護者等の理解を把握し、取組に生かす。 	88.2%	98	B	<ul style="list-style-type: none"> 学校だより「とみしのさと」や学校ホームページ、学級通信等を通して、保護者や地域に積極的・継続的に情報発信を行った。後期からは、学校ホームページに担当者によるブログを立ち上げ、日々の児童の様子を発信している。児童の姿を通して学校での教育活動の様子を知らせることにより、約88%の肯定的評価を得ることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後とも、学校ホームページなど様々な方法で伝えるとともに、「きさ教育の日」の取組をはじめ、「きさ」小中一貫教育推進協議会の活動を通して、連携教育の取組をさらに情報発信していく。 	A
働き方改革	教職員の児童に向き合う時間の割合を増やす。	<ul style="list-style-type: none"> 働き方改革により、児童に向き合う時間の割合が増えた実感を感じる教職員の割合を80%以上(昨年度79%)にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 学期ごとのアンケート、メンタルヘルスチェックにより実態を把握し、学校衛生委員会、企画委員会の取組を行う。 	92%	115	A	<ul style="list-style-type: none"> 教職員へのアンケートの結果、教務事務補助員や学校支援員等の人的配置、日課表の見直し、業務のデジタル化等の取組により、児童に向き合う時間がある、またはある程度であると答えた教職員が92%であった。 教職員の効果のあった業務改善として、「仕事の書き出しと優先順位の決定」や「ICTの有効活用」、「見通しをもった仕事」等の意見が出された。 	<ul style="list-style-type: none"> 業務改善に係る意見を教職員より広く募り、家庭学習や校務分掌の見直し等の取組等を通して、児童に向き合う時間をさらに確保するとともに、教職員の働き方改革についての意識向上を図り、時間外勤務時間縮減を図る。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 余裕をもってこそ教育できる。時間をつくってほしい。 中間評価時より数値が良くなっている。校長先生をはじめ教職員が一丸となって取り組んでいる成果だと思う。

(評価) A: 100 ≤ (目標達成) B: 80 ≤ (ほぼ達成) < 100 C: 60 ≤ (もう少し) < 80 D: (できていない) < 60